

# 地方 紀民 行鉄

## 伊予鉄道株式会社



伊予鉄道の電車に揺られつつ『坊っちゃん』を読む。沿線に散らばる文豪の足跡を追えば、思いがけない景色に出会える。

### ターナーとは何の事？

ターナーの絵って、どんなだったっけ？。伊予鉄道郊外電車高浜線の終着駅・高浜駅から徒歩数分。高浜港の端に立ち、沖合いに浮かぶ、大中小の岩礁から成る四十島こと「ターナー島」を眺めつつ独りごちる。

松山と言えば夏目漱石の名作『坊っちゃん』の舞台。松山市内を走る伊予鉄道の沿線には、当然、ゆかりの地が点在している。目の前にある四十島もその一つ。坊っちゃんと一緒に釣り来た教頭「赤シャツ」が、ターナーの絵に似ているとして、そう名付けた小さな無人島だ。

松山の街について、辛口な評価ばかりしている坊っちゃんが、珍しく「こんな奇麗な所」と評している景色であるから、ぜひとも見たい。そう思って、松山に着くなり一番に、やって来たのだけれど、この景色は、島の子は、本当にターナーの絵のようなのか？ 肝心のターナーの絵が思い浮かばない。

『坊っちゃん』の中にヒントはないかと読み返してみると、どうやら岩礁の上の松の形が「ターナーの絵にありそう」ということだが、それでもやっぱり思い出せない。ターナーの絵と比較はできないけれど、曇り時々晴れの空の下、雲間からうすすら差し込む光を受けた島の景色には、不思議な迫力もあって、印象的なものであることに変わりない。

坊っちゃんも「ターナーとは何の事だ」と言っていることだし、まあいいか。

### 見るべきは、「海にある駅」

ターナー島を眺めつつ、梅津寺駅方向に海沿いを歩くと、高浜線の線路はいったん、遠ざかるが、梅津寺駅に近づくにつれて、再び線路がぐっと海沿いに寄ってくる。

高浜駅に向かう行ききの電車では、『坊っちゃん』を読み返すのに夢中で、車窓の景色をほとんど見なかつたけれど、高浜線は梅津寺駅から港山駅あたりまで、海のごく近くを走っている。「海沿いを走る電車」「海に近い駅」、もうそれだけで間違いない景色を約束された気分になる。

こちらの期待を察したように、空を覆っていた雲がどんどん流れて行き、青空が顔を出す。そしてたどり着いた梅津寺駅の前には、絵に書いたような青い空と青い海。

まっすぐに伸びたホームに立って、海側を望めば、そこは歩道でも車道でもなく、すでに波打ち際。港山駅方向に伸びる線路は、それを支える土台部分が直接、波に打たれてさえる。これはもう、「海に近い駅」というより「海にある駅」。

文句のつけようもない景色。何とか写真に写し撮れないものかと頑張ってはみたけれど、素人の腕では、この景色の奥行きや空気感まで切り取ることは難しい。写真を諦めて、ひたすら見る、見る。

このまま天気かまては、夕景も間違いなく…とは思っけれど、日没まではかなり間がある。おまけに、広々とした景色を演出するサンプルで開放感のあるホームは、その分容赦なく寒い。まだ見ていたい気持ちに寒さに負



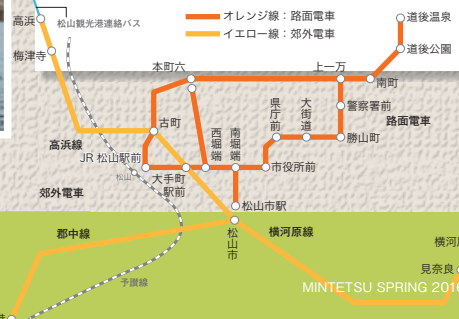
梅津寺駅は「海にある駅」。絶景は、晴れた日に肉眼でぜひ。



ターナーの松は、枝ぶりに特徴があるとか。

### 伊予鉄道 【いよてつどう】

松山市中心部を走る路面電車と、いずれも中心市街地を経由する郊外電車3路線を運行。「1Day チケット」など企画切符も多く、観光にも便利。





漱石と坊っちゃんの勤務校はすでに移転。跡地には記念碑。



路面電車は色も形もさまざま。

### 職住近接。先生は大変だ。

けて、しぶしぶ電車で避難する。

車窓の景色が海沿いの町のものから、都市のものに変わると松山市中心部に到着。伊予鉄道も郊外線から中心部を走る市内線に乗り換えになる。市内線は路面電車だ。

鮮やかなオレンジの四角い車体、オレンジとクリーム色の2色使いに丸みを帯びた車体、松山銘菓の広告塗装をされた車体…。自動車にさまざまな車種があるように、車道を走る路面電車もさまざまらしい。松山市駅前から、鮮やかなオレンジ色の電車に乗って、二つ目の市役所前ですぐに下車。数十歩で到着したのは、松山中学校跡地。

松山中学校は坊っちゃんが赴任した、つまり著者・夏目漱石が赴任した学校。学校自体はすでに移転しており、往時の場所には跡地を示した記念碑があるのみ。漱石の下宿先「愚陀佛庵」や坊っちゃんの下宿先のモデルになった宿屋も、すでに「跡地」になっているけれど、それを示す案内板が立てられている。

学校跡地からそれぞれの下宿の跡地までは、電車に乗るまでもなく、徒歩数分の距離にある。かなりの職住近接。作中、坊っちゃん、私生活のあれやこれやを生徒に見られ、からかわれているが、実際に漱石先生もそんな目にあっていたのではないか。この距離ならば無理もない。一歩でも家を出れば、生徒の目はどこにでもあっただろう。先生は大変だ。

### 当然ながら、泳げません。

さて、『坊っちゃん』ゆかりの地を巡るなら、坊っちゃんを通った道後温泉本館は外せない。いそいそと降り立った道後温泉の電停で、本館の場所を確認していると、小さな機関車「坊っちゃん列車」が走って来るのが目に入る。

「坊っちゃん列車」は道後温泉の電停で方向転換をする。それを知っている観光客も多いようで、乗客を降ろした「坊っちゃん列車」に視線が集まる。機関車部分が客車と切り離され、周囲が期待して見守る中、機関車は車掌さんと運転手さんの手で、ぐいぐいと押されて、回転終了。

手で回転させるとは聞いていたけれど、たった2人で、しかも素手で押して回すとは思わなかった。おもちゃのように小さな機関車は、おもちゃのようにかわいい「体重」なのだろうか。タイミングよく見られた予想外的一幕に大満足。それじゃあ最後は温泉へ。

道後温泉本館には神の湯・霊の湯の2種類があり、霊の湯の方が上等。さらに、茶菓のもてなしや浴衣の貸し出し、休憩所などによって入浴料が異なる。

坊っちゃんは常に上等に入り、人のいないときに湯船で泳いだりもして、「湯の中で泳ぐべからず」の注意札を立てられている。

こちらはいい大人なので、当然、坊っちゃんのように湯船で泳いだりはしません。というより、大人気の道後温泉本館は平日早めの時間でも大賑わい。人目があまりに多すぎて、泳ぐどころじゃありません。残念！



道後温泉本館。この看板は、男湯に実際にあるとか。坊っちゃんがお団子を食べた生徒に見られたのも道後温泉。



「坊っちゃん列車」は手押しで回る。実は、転車装置を内蔵しているため、手でも回せるとのこと。